



一面の菜の花畑。耕作放棄地対策のみならず集客にも大きな役割を果たす

蜜がたまったら巣枠を遠心分離器にかけて蜜を取り出す



作業はハチを刺激しない白い服と長靴、つばのある帽子、面布が基本



1日目、秋ソバの種を蒔き、巣箱を設置

ユンボやチェーンソーを使って耕作放棄地を再生



低炭素杯 2016



セブン-イレブン記念財団 最優秀地域活性化賞

広島県立 油木高等学校



低炭素杯2016授賞式にて

耕作放棄地をミツバチの里に

広島県東部にある神石高原町は、中国山地の森林に囲まれた自然豊かな町だ。主な産業は農業だが、過疎高齢化が年々進み、農業生産の減少と耕作放棄地の増加が深刻になっている。

広島県立油木高等学校は、耕作放棄地を花畑にし、養蜂で地域活性化を図る、「ミツバチプロジェクト」に取り組む学校だ。油木高校の産業ビジネス科は、農業や地域の課題を学び、解決法を考える授業を行っており、養蜂のアイデアは授業の中から生まれた。

「神石高原町は平地が少なく、傾斜地に田畑が開かれて農業が営まれてきました。小さな耕作放棄地があちこちに増え、広い土地を使う再利用ができない。蜂は飛ぶことができるから、点在する耕作放棄地に花を植え、ミツバチの里にしようと考えました」と、指導にあたる宮本紀子教諭は話す。

る生態を利用した。「初めての養蜂でしたが、ミツバチの生態に興味深くて、みんなで熱中して取り組みました。標高約500mの神石高原町は、夏も涼しくて女王蜂の産卵ペースが落ちず、ミツバチの繁殖に適した環境だとわかりました。一連の作業を実際に体験しながらマニュアルを作り、養蜂技術を復活させることができました」(宮本教諭)

蜜がたまったら巣箱が重くなると、遠心分離機にかけて蜂蜜を採る。養蜂は蜂蜜を作るだけでなく、夏に増やしたミツバチを果樹や野菜の花粉交配用に販売できる。ソバに続いてレンゲや菜の花を植えていった。耕作放棄地対策として、高齢の農家でも行える養蜂技術を町内外に広め、現在、町では4軒の農家が養蜂を開始している。

2012年、JAの大会で宮城県を訪問した生徒たちは、東日本大震災の被災地のようすに衝撃を受け、できることはないかと話し合った。宮城県亘理町のイチゴ農家の甚大な被害を知り、花粉交配用のミツバチを送ることを思いついた。地元ラジオ局や卒業生からの協力も得て、12年秋に15箱15万匹のミツバチを送ると、12月、栽培ハウスを飛び回るミツバチの写真とともに、イチゴの出荷を報告する札状が農家から届いた。以来、遠く離れた東北の農家との交流が続いている。ま

2010年5月にミツバチを導入し、授業と実習で養蜂を学び始めた。JAグループのコンテストでアイデアを発表すると、全国大会に進出。活動を知った町の農家が、20年以上放置されていた耕作放棄地を貸してくれたことになり、雑木を撤去して土を耕し、まずはソバの種を蒔いた。

神石高原町は、かつては養蜂が盛んな地域だったが、輸入される安い蜂蜜の影響で衰退し、養蜂技術は途絶えていた。近年、都市化や農業の影響で「蜂群崩壊症候群」というミツバチの数が減る現象が世界中で起きているように、ミツバチは環境の影響を受けやすい動物だが、初めて養蜂に取り組んだ宮本教諭と生徒たちは、初年度からミツバチをたくさん増やすことに成功した。巣箱から女王蜂のさなぎを取りだして別の箱に分けると、残された働き蜂が卵にローヤルゼリーを与えて新しい女王蜂を誕生させる。別の箱では分けたさなぎが女王蜂になり、卵を産んで繁殖し、新たな群れができる。「分蜂」と呼ばれ



2年目、レンゲの花畑に姿を変えた耕作放棄地



巣箱の中の巣枠。ミツバチはここにミツロウで巣を作り、蜜をためていく

巣箱のふたを開けるときは燻煙器の煙をかけてハチをおとなしくさせる



被災した宮城県のイチゴ農家へミツバチを贈る(左)。イチゴのハウスでは花粉交配用のハチが欠かせない



蜂蜜は瓶詰めやパウンドケーキなどに商品化



セブン-イレブン 記念財団が 支援しています